

義士傳 間重次郎 (七卷)

アシヤ時代映畫

原非脚色者 鈴木史郎
監督者 長尾史雄
撮影者 高橋武則

主要役割

間重次郎 松本田三郎
大石良雄 久野あかれ
お貞 金澤美都子
重吉 市川海老三郎
大石瀧左衛門 園千枝子
藤尾

「略筋。貧苦の内に病父を助け、妻子を憐れみて間重次郎は討入の時期を待つて居たが、お貞の父親は同が主君の仇を忘れ仕官の口を求めて居ると聞いて、お貞を離縁して連れ歸る。重次郎は一子重吉と病父を抱えて貧苦の生活を續けた。お貞は夫と愛兒の身を案じて、密かに重吉に金を與へたのを、重次郎は知り慰ま重吉を勸奮してお貞の手許に歸してやつた。討入の時期愈々迫つた時、重次郎はお貞と重吉に巡り合つたが、尙討入の機密を妻子に漏らさなかつた。お貞は夫に仇討の心無しと見て、夫の心を勵ます爲め、重吉と共に自害して果てた。重次郎はお貞の天晴れな振舞に感謝しつゝ、討入の同志の下へ馳けつけ吉真上野を一番槍で討ち亡君の仇を報じた。」

徒らに高級に走つて、返つて観客の不満を買ふ事を避け、専ら民衆娯楽の實を擧げんとするアシヤ映畫の作品標準は前作品「旗本金太」あたりで、よく知悉する事が出て来るが、本篇に於ては聊かその程度を越へ過ぎて、返つて失敗をして居る。評者は幸か不幸か浜曲映畫と銘打たれて居る本篇を琵琶入りで見せられたが、映畫放れたその内容には只々恐れをなした。浜曲入りの結果、此作品が如何に變化するかは斯言出来ないが、少くも現在の観客層が本篇を映畫として歓迎するとは絶対に信じられない。皮相的に流れた脚色、矛盾も甚だしいラストのカットバックなども此作品の大きな缺陷と云へるであらう。松本三郎の間重次郎も大芝居で、全然寫實味が薄く、折角の悲歎場も愚さらしくて感じが出て居ない。二役大石は意味なし。久野あかれのお貞は娘役より遙かによいが、此役を果し得るには無理である。金澤美都子の重吉はアシヤ映畫への初出演だが、現代劇とは勝手な違ふと見えて何處か板に付かない節が見えた。長尾史雄氏の監督は氏の作品に本篇あるを悲しむ、本篇が氏の一代の愚作となつて終る事を切に望む。山本綠葉
興行價值——必ず浪花節入りなる事を要す。さもなき時は興行上に破綻を及ぼすかも知れない。(一月五日 淺草千代田館)